地球に愛を子どもに愛を
活動PR誌
エコキャップ新聞
第3号　平成28年12月号

発行：NPO法人 エコキャップ推進協会
〒231-0023 横浜市中区山下町252グランベル横浜3F　TEL. 045-900-0294(代)　FAX. 045-900-0295
E-mail：info@ecocap.or.jp　http：//www.ecocap.or.jp

NPO法人 エコキャップ推進協会 ECOCAP

●企業 CSR 特集
・一般社団法人保険健全推進機構　結心会の社会貢献活動
●エコキャップ運動の方向性
・雇用創出こそが企業の社会貢献だ
・こどもたちの行動力と柔軟な発想が企業を動かす
●守口市立第一中学のエコキャップ運動
●横浜市立駒岡小のエコキャップ運動

企業CSR特集

一般社団法人保険健全化推進機構 結心会の社会貢献活動

本日は、一般社団法人　保険健全化推進機構　結心会の上野直昭会長にお話を伺います。

結心会は全国の店舗型保険代理店の組織です。加盟店舗する店舗数は、約７００店舗・保険代理店７０社・生命保険・損害保険会社１５社が加盟しており、ショッピングモールや商店街などの多くのお客様がご来店いただける場所に、店舗展開しています。保険の販売形態は、時代の変化と伴い大きく変わってきています。

来店型の保険ショップも８年前には１００店舗ぐらいでしたが、現在はその２０倍と言われています。お客様自身も、個々の保険の有利性や保険契約内容について、知識を持つようになり、より有利な保険を比較しながら選ぶという時代になりました。

保険の支払い代金は、マイホームに次いで２番目に多い割合を占めているといわれています。

消費者のみなさんが、有効的な財産形成をする上で、保険商品を比較するというのは当然のことだと思います。

上野会長にその飛躍の秘訣をお伺いしました・「保険商品を売るのではなく、結心会では地域と密着したハブの役割でなくてはいけないと思います。地域の代理店さんも多いのですが、地域と方々のよろず相談窓口であること。おもてなしの心を大切にすること。そして地域の方々に恩返しをすることがすべてだと確信しています。この積み重ねが契約に結びついたり、資産運用のアドバイスができています。」とのコメント。

結心会加盟店では、これらをモットーに、ショップの一部を地域の方々にご利用いただくためのギャラリーを作るなど、地元の方々に愛される店舗設計をしています。

エコキャップ推進協会の趣旨に賛同いただき、障がい者アート（ユニバーサルアート）の巡回展などのご協力や各店舗でキャップの回収運動にもご協力いただいています。

もちろん各店舗は地域の方々と連携してキャップの回収運動にもご協力いただいています。上野会長とも親しい間柄ですので、知的障がい者の中に文化芸術面で天才的な才能の方々がいることをよく話をするのですが、今後も障がい者のすぐれたアート作品の巡回個展や、絵画

上野直昭会長と障がい者アート

コンクール等のご協力をしていただいています。
この障がい者アート展も回を重ねて、現在では文部科学省の元副大臣の鈴木寛氏に理事長を就任をいただき、より多くの才能ある障がい者アーティストの発掘・育成を行っています。
エコキャップ推進協会の障がい者の雇用創出の他、障がい者のアート支援にも収益を使っています。

■新たなる挑戦！

障がい者雇用創出・高齢者雇用促進を推進している当協会は障がい者作業所の開設をする中で新たな問題点を感じています。
それは障がい者も高齢者も住まいの問題を抱えているということです。上野会長ともその件では相談していまして、障がい者・高齢者という理由で住宅の賃貸借契約ができないことの現実があることです。今や年金だけで老後を豊かに暮らせる時代ではなくなってきています。住まいの問題は経済格差によって深刻さを増しています。健常者であれ障がい者であれ高齢者になった時の住まいをどう解決するか・・・・。働ける障がい者が安心して生活できるグループホームなどの不足問題を解決するために、現在、信託銀行や保険会社、弁護士の方々と空き住宅の活用や老後安心して暮らすためのシステムつくりを話し合っています。
障がい者の方々が自立して生活するためには、地域社会や企業の理解が必要になります。全国民の16人に1人は何らかの障害があるといわれています。
私自身も人工透析患者（障がい1級）ですので、今は人一倍働いていますが、老いと共に車椅子で移動しなくてはならなくなるかもしれません。
すでにこれらの問題解決を手掛けている施設もありますが、透析クリニック付きのグループホームや知的障害者の自立の為の施設が必要とされています。
透析予備群といわれている患者は1600万人といわれていますので、内部障がいの患者さんも増えていくことでしょう。
乳幼児の反応に疑問を持ち、診断結果、何らかの障害があるいと認定されたところから、その両親や親族は苦悩がはじまります。 成長に伴って障がいのあるお子さんを抱えた保護者は、自分の目の黒いうちにこの子どものためになんとかしなくてはと考えるようになります。
特別支援学級や特別支援学校を卒業してからの就労活動と共に自立できる生活訓練が待っています。残念ながらまだ今の日本では障がい者が自立して仕事をしたり生活をする社会になっていません。
障がい者を見て見ぬふりをするのではなく、個々の才能を活かせる社会構造を構築しなくてはならないと上野会長と話して数年が経過しています。
これらの趣旨にご賛同いただいている保険会社・金融機関・不動産業の方々の輪が広がってきています。
「あらたなる挑戦！」である障がい者・高齢者の雇用創出に加えて、グループホームの設置や障がい者を受け入れてくれる大家さんが増えてくることを推進していきます。
障がい者を抱えているご家族の苦労や負担は大きいです。
健康であったときよりパワーアップしているつもりの私ですが、私の家は妻とふたりの家族構成です。何一つ文句を言わない妻ですが、その精神的な負担や家事への負担は大変なものだと私自身感じています。
「障がいがあることでの経済的な負担を含めて、民間レベルでも新たな知恵でよりよい社会を作っていかなくてはなりませんねぇ・・。」と上野会長とも真剣に論議を重ねてきています。
企業の社会貢献は「雇用を創出することだ」と初代笹森理事長の言葉でしたが、いろんな企業が本業に由来して、無理のないことでCSR活動をしていただくと、世の中の仕組みは大きく変わってきます。国会でいろんな立法をしてもそれだけでは世の中は変わっていきません。「今こそ民間企業が主体となってすべての市民が生活しやすい社会をつくる時代だ！」と上野会長の言葉に共感しました。

エコキャップ運動の方向性

エコキャップ運動が始まって10年を経過しようとしています。
創世期のエコキャップ運動は、前号でも掲載したように、女子高生のリサイクル・分別に対する疑問から、分別したキャップが再生できるかとの立証実験からスタートした話をお伝えしました。
この頃は、理事長である私は、この運動以外に子育て支援のNPOを運営していました。乳幼児向けの施設の他に、区の公園のログハウスの運営、小学校の放課後キッズクラブの運営を14施設の運営をしていました。その中の横浜市西区の戸部小学校の放課後キッズクラブは運営していた1つです。
放課後キッズクラブの職員には、「子どもの話を傾聴すると私たちがドキッ！とすることがあります。子ども達の行動力と柔軟な発想は、むしろ我々大人以上に素晴らしいものがあります。ですから子どもの言葉を聞き流してはいけない」と指導してきました。
キッズクラブの児童は自主的にキャップ回収を行い、やがて校長より総合学習の依頼がいました。これが学校の総合学習のはじめての依頼でしたので今でも覚えています。
その時の5年1組の児童たちとの事業は一言一句いまでも鮮明に覚えています。
質疑応答も多くの児童からあり、「温暖化す

学生は素晴らしいと感じた連合町内会長は、各町内会長や商店街会長などを集めて、プレゼンの場を作っていただいたのだと聞いています。
その結果、3か月の間に27万個のキャップを地域と連携して回収したのです。

子どもたちの行動力と柔軟な発想が企業を動かす

当協会もその子どもたちの行動力に驚きました。そしてこの話題がNHKの週刊子どもニュースに取り上げられると、瞬く間にこの運動が全国の小中学校に広がっていきました。
子ども達の行動力や柔軟な発想をサポートすることで、エコキャップ運動を企業CSRとしている企業は全国で4万6千社を超えています。

ると私の家は海抜10mぐらいだけど水没するの?」「エコってどういう意味?」などの質問が多かったです。
その総合学習でも男子児童が「おじさん、プレゼンテーションってなに?」との質問がありました。「おおっ!そこを聞いてきたか・・・。」と感じましたが、「プレゼンテーションって、このPCはパワーポイントというソフトを使っているけど、みなさんな ら例えば模造紙に絵で描きながら説明すると、地域の方々やお友達もわかりやすいよね。これをプレゼンテーションっていうんだよ」と答えました。
するとこの男の子たちは自らプレゼン資料を作り、連合町内会長にプレゼンテーションをしたのだそうです。最近の小女子高校生のリサイクル・分別への疑問、そして戸部小学校の男子児童の質問を傾聴して、それに向き合う姿勢がなかったならば、この運動は広がっていないと実感しています。
このエコキャップ運動は、子どもたちの底知れない行動力と柔軟な発想があったからこそ、発展してきました。我々大人は、次世代を担う、未来の地球環境問題を解決してくれる子どもたちに、サポートしていく責任があります。
今や、世の中は分別することに抵抗感がなくなってきました。そして、再資源化するアクションは我々大人の仕事です。
この運動にご参加いたいている多くの企業・団体の方々にもご理解いただいていると思います。
この学校での総合学習は、現在も継続して続いています。
本年11月28日の横浜市立石川小学校の5年1組の総合学習に講師として参加させていただきました。
10年も経過すると、質問のレベルが高くなっています。例えば、具体的にどんな企業が再生素材を使って、製品を製造販売していて、そのメーカーはどこか・・・。こんな製品は作ることができないのか・・・。等の質問が多く、子どもたちのリサイクルや分別に対する認識の高さと再資源化は当たり前のことという考え方を実感しました。
私たち年代が、子どものころ遠足にいくと重いアルミの水筒を持参したのですが、今や軽いペットボトルをリュックサックにいれる時代です。便利になるわけです。

雇用創出こそが企業の社会貢献だ!

この運動に参加いただいている企業や協力業者の方々が、社会貢献としてキャップを集めていただいたり、より効率よくキャップの回収や分別、破砕、再生品化を考えていただいたりしてくれることが、リサイクル運動の輪を広げてくれることに繋がっています。
現在、いくつかの製品化に向けて、大学の研究室と連携して製品が生まれようとしています。発表ができる時期には、改めてご報告させていただきます。
また、当協会が次なる目的に加えた「障がい者・高齢者雇用創出」「エコステーション・エコファクトリー構想」ご賛同いただいている企業特例子会社や社会福祉法人の参加ご協力に感謝申し上げます。
障がい者・高齢者の雇用創出を行うと発表した時に、「そんなことは国がやればいいんだ!おまえらは寄付だけすればいい!」と言って離れて行ったリサイクル業者もいましたが、具体的に障がい者の方々や高齢者の方々が安定して働く場を創出、促進するのは民間企業がそれに対して、どう具体的な方法で実践していくかが具体的な解決策だと感じています。
誤解や批判はありましたが、今、着実にこの「障がい者・高齢者雇用創出」が全国にネットワーク化してきています。
この考え方を支持していただいている企業・団体・学校・市民の方々が多いことに自分たちの推進していることに間違いはないと実感しています。
初代理事長の笹森氏の「雇用創出こそが企業の社会貢献なのだ」との言葉が身に染みて感じています。

守口市立第一中学校のエコキャップ運動

第 70 回文化祭の 1 年生制作のエコキャップアート

エコキャップの回収運動を地域のみなさま方と連携している守口市立第一中学校は、第70回文化祭（平成28年度）で、一年生が中心となりエコキャップアートの製作をおこないました。グラウンド置かれたキャップを回収し、「異物除去や色分別をすることがとても大変でした。」と生徒のコメントがありました。

「こうした地味な異物除去や色分別は地域の障がい者施設（エコステーション）で行っています。」と竹中理事が説明すると「回収するだけでなく、障がい者の方々の仕事リサイクルをする中で重要な過程なのですね」とご理解いただきました。

今後もキャップの回収運動を地域と連携して、継続していきますと生徒代表からコメントをいただきました。守口市第一中学校のみなさん、ありがとうございます。今後もエコキャップ運動を推進してください。

生徒代表と竹中理事　表彰式にて

横浜市立駒岡小学校のエコキャップ運動

12月5日、横浜市立駒岡小学校のエコキャップ運動に対して、当法人の渡辺理事より児童代表に感謝状の贈呈をおこないました。

駒岡小の児童は、地域とみなさん、PTAと連携してキャップ回収運動に協力していただいています。

渡辺理事から「みなさんの集めたキャップは、地域の障がい者施設（エコステーション）で、異物除去、シール剥がし、色分別等の丁寧な作業を経て、大黒ふ頭にあるエコファクトリーで破砕されています。破砕されたキャップをチップというのですが、このチップから商品が作られるのです。

このようなリサイクルの循環の輪を作る中で、小学生のみなさんが地域と連携していくことで、日本のリサイクル率は向上していきます。今、この運動は海外にも広がろうとしています。みなさんの実行力と柔軟な発想が未来社会を築いていきますので、頑張ってください。」との励ましの言葉がありました。児童からも「バトンタッチのように、それぞれの役割がリサイクルの輪を作っていることをはじめて知りました。これからも頑張ってキャップを集めていきます。」とコメントをいただきました。

横浜市立駒岡小学校のエコキャップ運動に渡辺理事より感謝状贈呈